

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る



Vol. **23**

2023.3

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.



CONTENTS

特集

01 北海道遺産

第4回選定遺産の紹介／下川町、北広島市、今金町、白老町、上士幌町
全日本下の句歌留多協会

07 地域が動く・プロジェクト最前線

■ 妹背牛町 みんなでつくる親子の交流拠点 from ☆Moko

09 「つながる。HUBest」 【北海道型ワーケーション普及・展開事業】

人と地域との新たなつながりを生み出すワーク施設とコンシェルジュを紹介

■ しれとこらぼ(斜里町) 豊島和敏さん

■ KITAMI BASE(北見市) 西村貴子さん





写真提供：NPO法人北海道遺産協議会
(北海道遺産フォトコンテスト)



北海道遺産

令和3年、北海道遺産は第一回選定から20年の節目を迎えました。今回の特集では、これまでの歩みや取組等についてご紹介します。

掘り起こされた宝物を地域で守り、育て、活用していく中から新しい魅力を持った北海道を創造していくという道民運動が「北海道遺産構想」です。多くの北海道遺産には、深く関わりながら活動する「担い手」の皆様が存在します。地域の宝物を掘り起こし、育成・活用する過程で地域づくりや人づくりを展開し、自分が暮らすまちや地

北海道遺産構想とは

次世代へ引き継ぎたい有形・無形の財産の中から、北海道民全体のものとして選ばれたのが「北海道遺産」です。北海道の豊かな自然、北海道に生きてきた人々の歴史や文化、生活、産業、食など、様々な分野から選ばれています。そしてこの度、第一回選定から20周年を契機として、令和3年から第四回の募集・審査が行われ、昨年、6件の地域遺産が新たに北海道遺産に加わり、総計74件となりました。

掘り起こされた宝物を地域で守り、育て、活用していく中から新しい魅力を持った北海道を創造していくという道民運動が「北海道遺産構想」です。多くの北海道遺産には、深く関わりながら活動する「担い手」の皆様が存在します。地域の宝物を掘り起こし、育成・活用する過程で地域づくりや人づくりを展開し、自分が暮らすまちや地

選定基準は

選定の基準には学術的な価値や美的な価値など「客観的な評価基準」だけではなく、地域が保全・活用に取り組んでいるものや、今後の取組に期待できるものなどの「思い入れ価値」が大きなウェイトを占めています。この思い入れこそがこれからの北海道づくりにとって大切なものだと言えるからです。そして、この二つに「北海道らしさ」を加味して選定されています。一般的に遺産という言葉からは、「過去のもの」というイメージが広がりますが、「北海道遺産」は地域の未来を創造していく資産なのです。次ページからは、北海道遺産の選定、北海道遺産構想の普及・啓発、地域が行う保全・活用の取り組みへの支援などの事業を行っているNPO法人北海道遺産協議会の取組及び第四回選定で新たに選ばれた遺産をご紹介します。

北海道遺産とは

これまでの歩み 1997-2022

1997 (4月)	北海道知事(当時)が、「北の世界遺産構想」を提唱
2001 (5月)	北海道遺産構想推進協議会が設立
2001 (10月)	第1回選定25件を決定・公表
2004 (10月)	第2回選定27件を決定・公表(計52件)
2009 (4月)	協議会がNPO法人格を取得し、NPO法人北海道遺産協議会を設立
2018 (11月)	第3回選定15件を決定・公表(計67件)
2022 (10月)	第4回選定6件を決定・公表 既存遺産の名称変更※(計74件)

※江差町の2つの遺産を併せてひとつの名称として公表していたが、名称を変更し、2つの遺産として改めて登録。

第4回選定で新たに選ばれた北海道遺産6件をご紹介します！

しもかわの循環型森林文化
～森は光り輝く～（下川町）



◀機械化が進む冬山造材の風景



▲再造林された若い森林と成熟した森林に囲まれた下川市街地

「経済・社会・環境」の調和による持続的な地域づくりを目指すため、基盤となる森林を活かすための理念である法正林思想※1により「循環型森林（もり）づくり」を行っています。

現在、年間50haの伐採、植林、育林の適正な森林管理を6年間サイクルで継続しています。

この仕組みで、「雇用の場の確保」、「安定的な木材供給」、さらに「木質エネルギー創出」、「森林のメカニズムによる脱炭素」を可能にし、SDGsの目標である『誰一人取り残されない幸せな日本一の町』を創るために、「循環型森林文化創造」を実践しています。

※1：毎年の成長量に見合う分の立木を一定量伐採、植林することで、持続的な森林経営が実現される森林のこと。

北海道米のルーツ「赤毛米」
～人々の思いが育んだ地域の誇り～（北広島市）



◀見本田での活動の様子



▲稲穂の毛の「芒」が赤褐色の赤毛米は、今や全国的なブランドとなった「ゆめぴりか」「ななつぼし」の先祖。現在も「北広島市水稲赤毛種保存会」の皆さんにより毎年栽培されています。

「赤毛」は、今や全国的ブランドとなった北海道米の先祖であり、寒さに強いこの種もみを使用して、明治6年に、現在の北広島市島松の地で、中山久蔵が寒地稲作を成功させました。道南以北での稲作は不可能とされた中、中山は高い志と努力を以って稲作を実践し、入植者たちに収穫した稲を無償で分かち、寒地生育の技術指導などの長年の支援を行い、北海道中に稲作が広まるきっかけを作りました。

「赤毛」とこのストーリーは、見本田の復活や学校授業、商品開発など、地域の人々の熱い思いにより、現在も地域の誇りとして保存され、引き継がれています。



今金・美利河の金山遺跡 ～後志利別川上流域の砂金採掘跡～（今金町）



◀昭和期の後志利別川での砂金掘り



▲地表面に生々しく残る砂金採掘跡

今金町の後志利別川上流域には、砂金採掘の遺跡が延長10km以上に渡って随所に見られ、源流域にはカニカン岳金山跡があります。これらは江戸時代前期の松前藩によるものとされ、特に美利河地区はその中心地で、現在も地表面に砂金採掘跡が生々しく残ります。本流域の産金地帯は当時としては国内最大規模を有し、大ゴールドラッシュの発生を物語ります。

幕末以降にも採金ブームが起き、特に明治期には北海道的な採掘技術を磨く場として歴史的に重要な位置を占めていました。昭和30年代まで砂金掘りで生計を立てる者がいて、当時の用具も残されています。

仙台藩白老元陣屋 ～幕末と明治維新を生きた北の防人～（白老町）



◀北海道最古の赤松を望む



▲北辺防備の拠点仙台藩白老元陣屋

江戸幕府は、嘉永6(1853)年の黒船来航により鎖国政策を断念して、下田と箱館を開港し、同時に、西欧諸国の日本進出を警戒して、東北地方の各藩に蝦夷地警備を命じました。白老元陣屋は、安政3(1856)年に仙台藩が構築し、慶応4(1868)年の戊辰戦争により撤退するまで12年間存続しました。

陣屋遺構には、土塁、堀割の重要遺構のほか、藩士たちが故郷から移植した赤松による歴史的景観などが比較的よく残されており、当時勧請した愛宕神社や塩釜神社、御霊を祀る藩士墓地では、地域住民が一世紀以上に渡り、例大祭や供養祭を挙行しています。



十勝三股の樹海 ～カルデラが生んだ生物多様性～（上士幌町）



▲高山や寒冷地の動植物が局所的に見られる永久凍土

また、この豊富な森林資源を求めて、過去大規模な林業集落が形成され、最盛期には約1500人と全国最大を誇り、運搬の旧国鉄士幌線とともに、地域の発展に貢献しました。



▲三国峠から見る十勝三股カルデラ

大雪山国立公園の東部に位置する十勝三股は、約100万年前の大規模噴火によつて形成されたカルデラです。約30万年前には湖が広がっており、その後、消失し樹海が成立しました。

十勝三股は、エゾマツをはじめとする広大な森林が広がるとともに、永久凍土などの寒冷地帯、温泉などの地熱地帯が共存することで、多様な生物が生息し生物多様性を高めているという特色があります。

下の句かるた ～木札、下の句にみる遊びの文化～（全日本下の句歌留多協会）



下の句かるたは、北海道に入植した人々により道内に普及しました。「木の札」であることと、小倉百人一首の下の句を読み上げる独特の競技は、北海道特有の遊びの文化であり、90年を超える歴史ある全道大会や小中学生の全道子ども大会（一般社団法人北海道子ども会育成連合会主催）も開催しています。

かるた競技は、厳格な雰囲気の中での対戦や緊張感の下で、礼節やチームワーク等を体験でき、世代を超えた交流や人間関係を学ぶきっかけにもなり、大人、子ども、性別を問わず競技を通して楽しみながら、日本古来の文化に親しむことに加え、地域コミュニティ発展の場として意義があります。



▲競技は3人对3人のチーム戦。前句の「韻」を聞き分けた瞬間に手を出す。



◀ホウの木でできた取り札は独特な書体で描かれている。